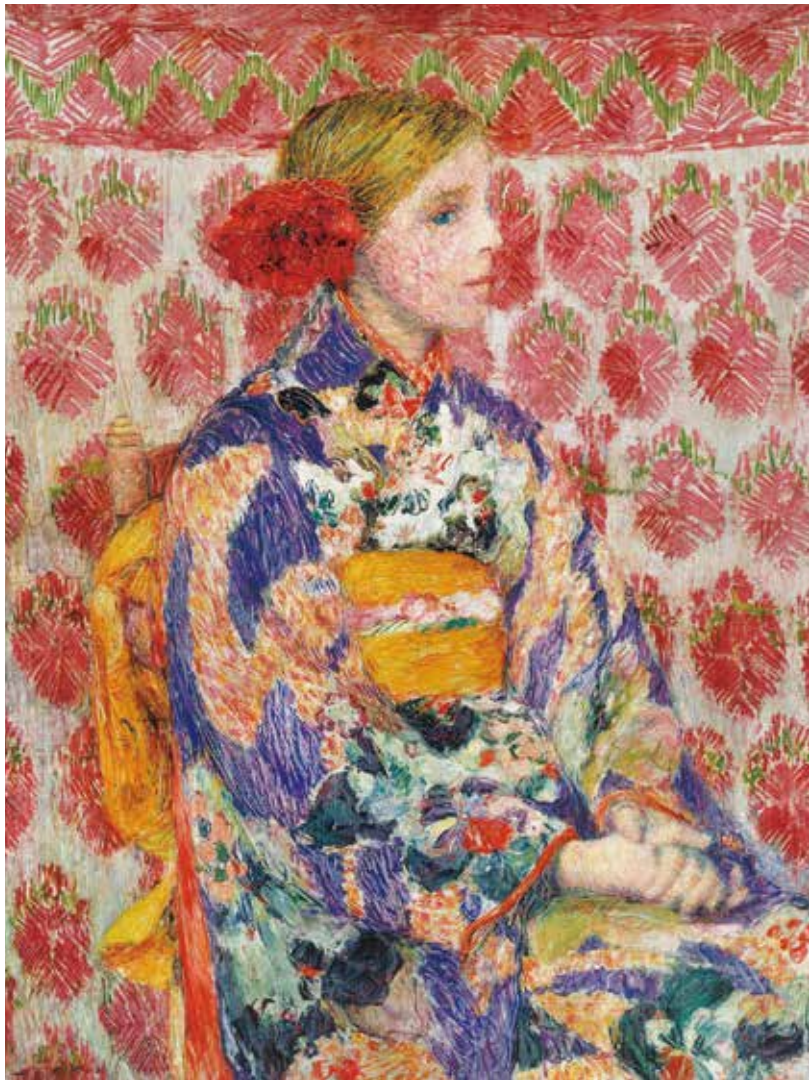


NARIWA MUSEUM

高梁市成羽美術館 だより

NO.40◆2024.3

編集・発行：高梁市成羽美術館
〒716-0111 岡山県高梁市成羽町下原1068-3
TEL 0866-42-4455 FAX 0866-42-4451
<https://nariwa-museum.or.jp/>



《和服を着たベルギーの少女》
児島虎次郎
1910(明治43)年 油彩・キャンバス

鴨居玲——1983年2月3日、私

2023年4月8日[土]—6月25日[日]



展覧会ポスター

作品から目が離せないのでしょうか。それはおそらく、今も昔も変わららず、むしろコロナ禍を過ごした我々はより強く、鴨居と同じ疑問を持ち、悩んだ経験があるからではないでしょうか。人として本当に大切なものとは何か——「人間とは何か？」。

当館では笠間日動美術館のご協力のもと、「人間とは何か？」を生涯問い続けた画家鴨居玲の展覧会を開催しました。大作や自画像、習作の油彩をはじめ、最近発見された初公開のデッサン類、そして鴨居の愛用していたペンチなど、合わせて約70点をご紹介します。

鴨居の作品の多くは人物画で、どれも苦悶か、虚無で読み取れないような表情をしています。これらの作品は見ていると、初めから作品を観ること、ないし鴨居を知ること自体をやめてしまう人は少なからずいるでしょう。しかし、そんな鴨居には熱烈なファンが根強くいることも事実です。そして彼の作品は令和になった今、若者達の心をも掴み始めています。なぜ人々は、鴨居の

作品から目が離せないのでしょうか。それはおそらく、今も昔も変わららず、むしろコロナ禍を過ごした我々はより強く、鴨居と同じ疑問を持ち、悩んだ経験があるからではないでしょうか。人として本当に大切なものとは何か——「人間とは何か？」。

鴨居は1928年、石川県に生まれました。有名な新聞記者であった父の紹介で、宮本三郎に師事し洋画を学びます。二紀会で活躍し、若い頃より注目されますが、日本画壇の主流とそりが合わず、自身の作風を確立できずに青年期を過ごします。自由奔放な性分からパリなどを渡り歩く中、様々な文化やそこに生活する人と触れ合い、人物画を中心に描くようになります。そして1969年、表情の読めない不穏な男達が画面に捉えられた作品『静止した刻』で安井賞を受賞します。一躍時の人となった鴨居ですが、それ故の注目や期待が辛かったのか、日本を離れスペインに拠点を移します。生活水準は底辺でも、陽気な酔っ払いが多く愉快な町、ラ・マンチャ地方のバルデペーニャスを気に入り、そこにアトリエを構えました。のちに鴨居はこの町を、愛情を籠めて「私の村」と呼び



会場風景

ました。

日本に帰国後の1984年、鴨居は心筋梗塞で倒れます。初めて「死」を身近に感じた鴨居は、それから死の欲動に囚われてしまうのです。無類の酒好きだった鴨居は過剰な飲酒や自殺未遂を繰り返すようになり、1985年、その人生に自ら幕を閉じました。

57歳という若さでこの世を去った鴨居。鴨居のアトリエに残されていた自画像(絶筆)は、展示室最後のスペースで紹介しました。小さな作品ながら、この赤い自画像の前に多くの人々が



担当学芸員によるギャラリートーク

立ち止まり、見入っていました。その中の多くは若い方で、大学生から中学生の姿もありました。

人の心の弱さや醜さ、死を見つめ続け、自分自身の生きざまを貫いた鴨居。本展でご紹介した生涯の軌跡が、今生きる人々の糧となれば幸いです。

世界の道しるべーヤバイ現代美術 タグチアートコレクション展

2023年9月16日[土]ー2024年1月14日[日]



展覧会ポスター

器具を使用した作品の部屋まで世界を代表するアーティスト39名の作品約70点を展示しました。

成羽美術館としては、このような本格的現代美術の作品展示は初めてのことで、展示準備には大変苦労しました。一つ一つの作品の大きさに驚くとともに、NYから送られてきたままのウエイド・ガイトンの作品は、ロール状の作品をキャンバスに張り展示まで丸三日かかりました。しかし展示してみると、どの作品も迫力に満ちて観る人を感動させずにはおかない力があります。これが現代美術の魅力かと認識を新たにしました。

会場では、現代美術に少しでも親しんでいただくために、可能な限り作品写真撮影OKとしました。皆さん、お気に入りの作品の前で撮影される姿がよく拝見されました。

ポスターに使用した奈良美智の作品《ゴズミック》は、今展の人気ナンバー1で、作品から、この宇宙すべてに『愛』が満ち溢れているかのような温かさを皆さん感じられたことと思います。

また1階静水の庭ホールに設置した宮島達男の立体デジタル作品は、1から

9までの数字がアトランダムに降り注ぎ、光り輝く数字が背景の空に美しく映えて、その一瞬一瞬がまるで人生の一期一会を思わせるようで感動的でした。

写真アートの部屋ではザネレ・ムホリの作品が感動的でした。洗濯ばさみや炊事用手袋に覆われた彼女の肖像写真は、迫力に満ちて黒人女性の差別に抗議する強い意志が感じられます。

現代美術作品の一つ一つには、現代を生きる作家が持つ生き生きとしたテーマや問題意識が色濃く反映されていることを感じ取ることが出来る、どの作品の前にもじっと佇むお客様の姿がよく見られました。

会期中の入館者数は1万人を超えました。必ずしもアクセスのよくない美術館に多くの方がお越し下さったことに感謝の気持ちです。特筆すべきは



展覧会関連イベント 10月8日(月)ピアニスト石井明子氏によるミュージアムコンサート



会場風景



県内はもちろん県外からも多くの来館者があり、毎日のように海外からのお客様が来館されたことです。2025年秋には第2回『タグコレ展』を予定していますので、楽しみにしていただければ幸いです。

一般財団法人地域創造助成事業 ベルギーと日本―光をえがき、命をかたどる

2023年7月8日〔土〕―8月27日〔日〕



展覧会ポスター

本展は、目黒区美術館、新潟県立近代美術館との3館合同のオリジナル巡回展企画であり、このような大掛かりかつ独自の展示は今までになかった試みとなりました。また、当館だけではお借りできないような、貴重な作品を多く集めることもできました。

目黒区美術館、新潟県立近代美術館と当館は、大きな共通点が1つあります。それは、戦前にベルギーへ留学したことのある芸術家の作品を収集していることです。いうまでもなく当館は児島虎次郎、そして目黒区美術館は太田喜二郎、新潟県立近代美術館は武石弘三郎です。

当時、芸術家たちの留学先と言えばフランスが主流、印象派といえはフランス、といったご時世の中、彼らはそれぞれの理由と繋がりで滞在先としてベルギー

を選びました。もともと太田と児島は友人であり、太田の誘いもあって児島

はセント王立美術学校で学びます。また、ベルギー印象派として名高いエミール・クラウスが太田の師となり、児島も作品の批評を受けていました。

一方、武石は彫刻家で2人とはあまりつながりがないように見えますが、当時弟子を取るつもりがまったくなかったクラウスをなんとか説得して太田を紹介したのが武石で、さらにその後児島にクラウスを紹介したのが太田だったのです。本展覧会では、この3人がどのようなにベルギー芸術を学び、日本へ伝えたのかを主軸に、ベルギーと日本の芸術交流あるいはベルギー印象派の日本における受容について検証しました。

展示は3章で構成されました。

第1章

「光をえがく」

ベルギーの印象派絵画と日本

19世紀後半、戸外において、光の輝きを線や輪郭にとらわれることなく描く技法がヨーロッパで広がりしました。



その技法には2つの派がありました。1つは感覚や経験を重要視したフランス印象派と、もう1つは光を科学的に分析して描くことを重要視した新印象派です。この新印象派はベルギーへ紹介され、のちにエミール・クラウスを代表に独自の発展をとげ、ベルギー印象派として受容されていきました。第1章では、日本における近代洋画の黎明期に、ベルギー印象派が果たした役割について、時代を追いながら太田と児島の留学時の作品を中心に検証しました。この章で目をひいた作品は、

クラウスの《フランドル地方の収穫》(姫路市立美術館所蔵)で、田舎の農作業風景を点描で鮮やかに描いた、ベルギー印象派らしい作品です。また、太田や児島の「勉強中」の作品も多く展示しました。彼らの学びの中の試行錯誤や技術の発達を絵の中に垣間見ることができたでしょう。2人は親友同士であり、互いに切磋琢磨した仲だったようです。太田は大変まじめに師匠の技術をそのまま習得しようとしたことに対し、児島はただ技法を真似るだけではなく、自分自身の画法を確立

しようとなりました。その違いもそれぞれの絵に見てとれ、互いの性格の違いまでも楽しめる章となりました。

第2章

「命をかたどる..」

ベルギーの彫刻と日本」

本章では、ベルギー彫刻と日本における受容を、ベルギーに留学していた武石の作品や活動を中心に紹介しました。武石はベルギー渡航後、ブリュッセルの王立美術学校に入学しましたが、



ジュリアン・ディレンスといった教師たちからアール・ヌーヴォーの優美で堅実な表現を学びました。その一方で、武石は自身の作風とはまったく異なる、当時ベルギーの彫刻界ですでに重鎮となっていたコンスタンタン・ムーニエを日本に紹介します。ムーニエは今日の日本ではあまり知られていませんが、武石やほかの留学生たちの紹介もあり、当時の日本の彫刻界では誰もが知るほどの存在でした。ムーニエは過酷な労働を強いられる労働者たちをそのまま力強く表現した作家で、当時の若い彫刻家たちに大きな衝撃を与えました。日本でも多くの彫刻家が影響を受け、そのような作品も本章で多く展示しました。特に齋藤素巖の丹那トンネル殉職慰霊碑レリーフには、身をかがめて一心不乱に岩石を掘る労働者の姿が描かれ、ムーニエの作品を彷彿とさせる圧巻の作品でした。

第3章

「伝える・もたらす..」

ベルギー美術の紹介」

ベルギーという国は、現在の私たちにとって少し遠い存在です。しかし当時は、特に芸術における側面でもっと身近な存在だったのかもしれない。それは、児島をはじめベルギーに留学していた日本人からの紹介だけでなく、雑

誌や書籍などのメディアでも取り上げられていましたし、展覧会もあったからです。なかでも戦災と震災の互いのチャリティー展は、来館者のみなさんの心を打つたことでしょう。ベルギーは、第一次世界大戦において大きな戦禍に見舞われました。そして日本では関東大震災という未曾有の災禍が起こります。この2つの悲劇的な出来事の際に、日本はベルギーに、ベルギーは日本に対してチャリティー展を開催し、互いに義捐活動を行ったのです。この素敵な交流は、結果、多様なベルギー美術を日本に紹介する一役を担うこととなったの



展覧会関連イベント 7月23日(日) 画家 関野智子氏によるワークショップ「光の窓・輝く世界」

です。来館者の方々には、ベルギーをより近くに感じていただけたのではないのでしょうか。

本展覧会を通じ、100年も前に出会った3人の日本人留學生の交流が、時を超えて3館の学芸員の交流、それぞれのご遺族との交流へとつながりました。そしてそれぞれがもつ情報を互いに共有することで、新たな発見がもたらされたのです。こうした意味でも、大変有意義な展覧会だったといえるでしょう。



8月13日(日) 絵画修復家 大原秀行氏による児島虎次郎・紙製張子額についてのレクチャー

福島隆壽

— 風土と群像 —

2024年2月3日[土]—3月17日[日]



展覧会ポスター

画業70年・飽くなき探求心

児島虎次郎没後95年、安藤忠雄氏設計の美術館新築開館30年を迎えた2024年、当館では虎次郎が属した「光風会」の重鎮であり、岡山県の画壇を牽引して92歳の今も精力的に活躍している画家、福島隆壽の回顧展を開催しました。

福島先生は東京藝大を卒業後、教職に就きながら故郷の津山風景をはじめ人物像を柱として、山陰や瀬戸内の風景を群像と組み合わせる表現してきました。会場には画業70年の歩みを概観する40点の作品が展示され、絵画制作のエスキースともいえるデッサンやスケッチが観覧者の目を引き付けていました。堅牢な構成と茶褐色で重厚な色彩の初期風景画、人物像に移行した後のセザンヌやマチスの青に魅せられた

鮮烈な美しい青の世界、そして緑や赤を駆使した人物像。固定の色にこだわらず自分の色彩に生きる福島絵画が観る人を魅了します。まさに福島隆壽の美の世界であり、90歳を超えた現在、「老醜」をテーマに更に新境地に挑戦しています。近作3点の大作では、年齢を感じさせない絵画への情熱と探求心が私たちの心を打ちました。

会期中には教職時代の教え子である画家、後藤晋氏によるワークショップ「構図を学ぶ」や、佐藤真菜氏（鳥取県美術館整備局専門員兼学芸員）による対話型鑑賞会が開催されて展覧会作品のさらに深い鑑賞の手助けにもなりました。今展で、多くの教え子の方々のご協力をいただいたことに感謝するとともに、福島先生のご健康と益々のご活躍を心から祈る次第です。



会場風景

児島虎次郎を偲ぶ

絵画コンクール

2024年2月3日[土]—3月3日[日]

2023年度は市内小中学校20校から1,175点の応募がありました。厳正な審査の結果、各学年から最優秀の「児島賞」、それに次ぐ「渡辺賞」など計191点が選出。学校生活や友達との時間、身近な風景など、日常を切り取った作品が美術館に展示され、週末ともなると、家族連れで来館し自分や友達絵を見つけて喜ぶ子どもたちで賑わいました。

今年度の児島賞・渡辺賞受賞者は次の通りです。（敬称略）

児島賞

- 土橋結永（高梁小1年）、田淵一（成羽小2年）、小松原好華（落合小3年）、鳴川蒼司（川面小4年）、黒川創真（成羽小5年）、川上星依空（玉川小6年）、安原永翔（高梁北中1年）、廣金福美（成羽中2年）、森下真弥（高梁北中3年）

渡辺賞

- 藤本千翠（中井小1年）、石野和泉（福地小2年）、笹田晴道（高梁小3年）、東洗太郎（松原小4年）、大西紗菜（松原小5年）、西龍星（落合小6年）、榎朝香（川上中1年）、大塚るな（川上中2年）、妹尾吉乃（高梁北中3年）

児島虎次郎を偲ぶ

絵画コンクール30年の歩み

2024年2月3日[土]—3月17日[日]



会場風景

児島虎次郎を偲ぶ絵画コンクールの優秀作品を当館で初めて展示したのが平成6年（1994年）のこと。あれから30年。この節目を記念して、これまでの児島賞受賞作品全2770点を展示しました。壁一面に並んだ30年分の作品の数々。絵の中の子どもたちは生き生きとしていて、当時の学校生活が目に見え、懐かしさを感じます。この先どんな絵に出会えるのか私たちも楽しみます。

岡山県立大学デザイン学部
ミュージアムグッズ共同開発
「成羽フローラ
プロジェクト」10周年



いた可能性が高い
(化石の証拠はあり
ません)大型爬虫
類のキャラクター
クッション。こち
らにはあつという間
に売り切れました。

岡山県立大学とのミュージアムグッズ
共同開発プロジェクトは、今年度で
なんと10周年を迎えました。こんなに
長く続くとは、大変感慨深い思いです。
10周年を記念して、今年成羽から
産出する植物化石以外にも、当時の森
に棲んでいたかもしれない動物たち
もモチーフに加え、さらにショップで
新たに導入した「ガチャガチャ」の
オリジナルカップセルトイを開発して
いただきました。ショップにはいつ
にも増して、バリエーション豊かな商
品が並びました。
特に目をひいたのは、成羽の森に

カップセルトイでは、植物化石のオリジ
ナルミニステッカーセットや、植物化石
ハンカチなどが人気で、60個ご用意しま
したが、おかげさまで完売。お客様
にも喜んでいただけたかと思えます。
次に目指すはさらなる10年。ますます
磨きをかけて皆様に素敵なグッズを
お届けできるように頑張ります。来
年は、夏に予定されている特別展にち
なで、ある可愛い動物&その化石を
モチーフにしようと考えています。ぜひ
ご期待ください！



完成したミュージアムグッズ



制作の様子

化石展示室をもっと活用
してもらうために

当館は美術館でありながら化石を展
示しており、成羽地域からさまざまな
植物化石が産出することで知られて
います。しかし具体的に「どんな種類
の植物化石が産出するのか」を、理解
するには高いハードルがあります。
確かに植物は私たちにとって身近な
生き物ですが、現生種を含め、種類や
その生態をちゃんと把握している人
は決して多くありません。しかも2億
年前の植物なんてなおさらですよ。
なぜなら、植物化石は恐竜など動物の
化石と違ってとても地味…。興味が
わきづらいのです。しかも木が1本
丸ごと化石になるなんていうことは
なく、たいていは枝の一部、葉っぱの
一部分、と、かなり断片的なのです。
そんなわかりにくい当時の植物を
できるだけイメージしやすくするため、
化石展示室にちよつとした策を講じ
ました。1つめの策は、主要な植物を
1種類ずつイラストに描いて森の
ようにした、巨大バナーを用意した
ことです。天井からぶら下げて、当時
の森の雰囲気を出してみました。それ
から、主要植物の復元図を実物大パネル
にして該当標本の近くに置きました。
2メートルもあるツクシ(トクサ)の

仲間になささんびつくりされます。当時
森にいた植物食動物が食べていた
とされるソテツやソテツに近い絶滅種
なども作ってみました。これだけでい
イメージしやすくなったと思います
(一般財団法人全国科学博物館振興財団
の助成を受けて製作しました)。
成羽の植物群化石は2億年前の地球
環境を教えてくれる貴重な化石です。
もっと親しみを持っていただけるよう、
今後もいろいろな工夫をしていきたく
と考えています。



化石展示室

美術館の環境を守る会

活動紹介



清掃活動の様子

世界的建築家安藤忠雄氏が設計した成羽美術館は、周囲の自然を借景とした建築が特徴です。緑と水を取り込んだ美術館の景観は、実は地域の方々の大きな協力があって維持されているのです。

美術館サポート組織「成羽美術館の環境を守る会」は、2007年12月に地域の有志の方々の呼びかけで発足しました。成羽地域の老人クラブや当館の市民ギャラリー・出展団体などが会員と

なり、夏と秋の年2回の清掃作業を主な活動としています。近年、その輪はさらに広がり、成羽中学校の生徒や、地元企業の方々も清掃作業に参加して下さるようになりました。また、「成羽美術館が好きで、清掃作業のボランティア募集を見て来ました」という方がいらつしゃることも。役員の方々が事前に入念な打ち合わせや準備を行い、80名近い参加者が集まって庭木の剪定や草取り、池の清掃に汗を流す姿には、ただただ感謝の一言しかありません。われわれ成羽美術館スタッフは、すばらしい美術との出会いや新しい発見の機会を提供し続けることで成羽に活気を呼び、環境を守る会の皆さんに恩返しできれば、と思っています。

清掃作業のご案内は当館HP・SNSでも行います。環境を守る会のパワフルな皆さんとの交流も楽しんでいただけるかもしれません。ご参加お待ちしております！

高梁市成羽美術館の最新情報はホームページなどをご確認ください。



市民ギャラリーの活動

市民ギャラリーは成羽美術館で行われる、成羽を中心として活動する美術・工芸グループによる作品展です。2024年度で開館30年を迎える成羽美術館ですが、開館当初から続く市民ギャラリーも恒例のイベントとなりました。期間中には市民ギャラリーの観覧を目的としてお越しになる方も多く見られます。

例年、主に作品展ださっているのは木工のなりわ工芸品同好会、絵画グループ「ブロッサム」、書道教室、機織教室、水墨画グループ「墨遊会」、吹屋ベンガラ焼き「炎の会」の6グループです。全グループ共通して、長年のものづくり経験によって培われた技術で制作された迫力やぬくもりのある作品が並びます。

グループ代表者の方々からは「年に1度の成羽美術館での展示を1つの目標として制作に励んでいる」という声もお聞きます。今後については、作品を通してワークショップのような体験型イベントへの意欲も。若い世代の方々にも制作へ関心を抱き、参加してもらおうことを新たな目標として、グループや作品展の継続を支援していきたいと考えています。

例年、市民ギャラリーは美術館1階の多目的展示室にて観覧無料で開催しています。展示期間中、グループメンバーが在館している際には、ぜひ作品や制作のことなどお気軽にお尋ねください。



ブロッサム絵画展

特別展年間観覧料変更のお知らせ

2024年4月1日より、購入者と同伴者1名が特別展・所蔵品展を1年間何度でもご覧いただける特別展年間観覧券の価格を次のとおりといたします。何卒ご了承ください。

従来 3,000円 ▶ 2024年4月1日～ 4,000円